研究ノート

看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化

兎澤惠子[1)]・古市清美[2)]・髙木タカ子[2)]

Change of elderly people image student's through Method of The Continuity Learning

Keiko TOZAWA[1)], Kiyomi FRUICHI[1)], Takako TAKAGI[1)]

要　旨

本研究の目的は、高齢者への理解を深めるために、レクチャー、高齢者擬似体験および高齢者施設見学を連続して学習することにより、学生の高齢者イメージがどのように変化するかについて明らかにすることである。研究対象者は看護大学１年生で、研究資料は高齢者擬似体験前後の高齢者イメージアンケート結果、高齢者擬似体験及び高齢者施設見学後の体験記録を用いた。アンケート調査用紙は対比した形容詞による５段階評価法で、平均値の差の比較にはMann-WhitneyのU検定を用いた。

その結果、学生の高齢者イメージは、体験学習前後の比較において、否定的イメージから肯定的イメージへ変化した。特に、「きれいな―きたない」「意欲のある―意欲のない」「強い―弱い」「健康的な―不健康的な」「幸福な―不幸な」「暇な―忙しい」「生き生き―生気のない」について有意差を認めた（$p<0.001$～0.01）。また、学生の年齢別比較では「生きがいがある―生きがいがない」について年齢が高くなるにつれて否定的イメージが高く、男女別比較では、「きれいな―きたない」について女性は男性より肯定的イメージに変化した。更に、連続した学習方法は、思考の連鎖により、身体的側面から健康観的側面へと学びの範囲を拡大させることが示唆された。

今後の老年看護学の構築に役立てることができると考える。

キーワード：高齢者イメージ　肯定的イメージ　連続学習　看護大学生

Ⅰ．はじめに

学生が描いている高齢者イメージを理解することは、学生にとっての真実を教育の出発点にするものでなければならない[1)]、という点で重要であり、教育が現実の上に立脚する事の必要性を示している。同時に、高齢者に対する援助方法を教授する上で有効である。

高齢者における看護教育は、1990年から「老人看護学」が基礎教育課程に加わり、1996年から「老年看護学」および「老年看護実習」として科目立てされた[2)]。2005年迄過去10年間の医学中央雑誌Webによる高齢者イメージに関する文献レビューにおいて、46例中、高齢者擬似体験前後の変化に関する研究が48%、授業前後の変化に関する研究が30%、臨地実習前後の変化に関する研究が13%、その他の臨床看護師における調査研究が９%であった。それらの研究結果は、看護学生の否定的イメージが学習によって肯定的イメージに変化したとするものが増加傾向にあり、また学習方法の妥当性を主張している。

一方、他領域をみると、社会科学領域における老年学の研究レビューでは、比較的早くから始まったアメリカにおいてさえ1970年代以前には老年期を人生の衰退の時期と捉え、特有の態度や行動の研究が一般的であり、高齢者は貧しい、病気がち、依存的、判断能力

1）群馬パース学園短期大学看護学科　2）群馬パース大学保健科学部看護学科

に欠けるといった固定的なイメージがはびこり、日本においても病気がちで貧しく、頑固な高齢者は家族や社会にとってお荷物にほかならないと捉えられていた。しかし、医学的生物学的研究に加えて社会学的研究の蓄積など、加齢に関する研究が深まることによって従来のイメージが変容しつつあり、その変化の理由は、少子高齢社会の増加に伴う経済的仕組みの影響や加齢に関する研究の結果による[3)]、と言われている。高齢社会突入という時代背景を踏まえた高齢者への理解と、看護に求められる質の高い援助の提供者を育成するために、有効な教授方法を検討する必要がある。

我々は今回、高齢者擬似体験および高齢者施設見学による連続学習が、看護大学１年生の高齢者イメージにどのような変化をもたらすか明らかにすると共に、老年看護学における導入教育の方法について示唆を得ることを目的とする。

II. 研　究　方　法

１．対象

調査対象者は、看護系大学生１年次の48名(男：女＝２：３)。基礎科目および専門基礎科目を主とした学習を開始して半年を迎えた対象者である。対象者の属性について表１にまとめた。対象者は18歳が31名(65%)、19歳が15名（31%)、20歳以上が２名（４%）であり、その平均年齢は18.7歳、男女比は２：３であった。また、高齢者と同居している学生は、女性29%、男性17%で、46%の学生が同居していた。更に、ボランティアの経験については、女性52%、男性29%で、81%の学生が高齢者と接している。

表１　参加学生の主な背景について　　n＝48

	女性	男性	合計
年齢			
18歳	19	12	31(65%)
19歳以上	10	7	17(35%)
性別	29(60%)	19(40%)	48(100%)
同居	14(29%)	8(17%)	22(46%)
ボランティア	25(52%)	14(29%)	39(81%)

人数（%）

２．方法および内容

１）調査期間；2005年８月30日から９月10日

２）調査方法；調査資料は、「基礎調査資料」、「高齢者イメージ・アンケート」、「体験記録」の３種類を資料とした。

「基礎調査資料」とは、属性に関することおよび学習の内容理解に対する満足度を尋ねたものであり、「高齢者イメージ・アンケート調査」（以後「アンケート調査」という）とは、小泉・伊藤により考案されたものを用い、連続学習の直前レクチャーおよび高齢者擬似体験、高齢者施設見学学習前後の調査に用いる質問紙である。集合調査法により実施した。また、「体験記録」とは、「高齢者擬似体験および高齢者施設見学後の体験記録」（以後「体験記録」という）で、学習終了後に提出した記録物である。学習課題として提示し自由記載により記録している。

尚、ここで言う連続学習とは、高齢者理解のためのレクチャー（約90分間、高齢者の概要）と演習（高齢者擬似体験キッド使用方法の説明)を１日目に実施し、グループによる高齢者擬似体験と高齢者施設見学を２日目に実施し、２日間連続して行った学習方法のことをいう。

３）アンケート内容は、肯定的表現から否定的表現まで５段階法により回答する、13対から成る形容詞を用いている。内容は、「自信がある―自信がない」「活発な―不活発な」「生きがいのある―生きがいのない」「強い―弱い」「生き生きした―生気のない」「意欲のある―意欲のない」「自立的な―依存的な」「健康的な―不健康的な」「きれいな―きたない」「にぎやかな―孤独な」「自由な―不自由な」「暇な―忙しい」「幸福な―不幸な」についてである。

３．分析内容および方法

体験学習前後のアンケート調査結果は、どのように変化したかを明らかにするために、「１かなりある」・「２ややある」を肯定的イメージとして１に、「３ふつう」・「４ややない」・「５かなりない」を否定的イメージに分け、平均値の比較に Mann-Whitney のU検定を用いた。また、基礎資料調査における学習満足度の結果について、「１かなり効果がある」・「２ややある」を１、「３ふつう」を２、「４ややない」・「５かなり効果がない」を３とし、平均値の比較に Kruskal Wallis の検定を用いた。

更に、連続学習が学生にどのような影響を及ぼしているか、自由記載された体験記録を一文一意味で整理し、内容をカテゴリー化して分析し検討した。

尚検定には、統計解析パッケージ SPSS11.0を使用し統計学的解析を行った。

4．倫理的配慮

学生によるアンケートの協力については、事前に研究目的と方法、公表について説明をおこなった。また、未記入であったとしても個人評価の対象にならないこと、自由意志であることなどを口頭で説明し、了解を得た。データは研究論文の完成時に破棄することを伝えた。

Ⅲ．結　　果

1．高齢者イメージ・アンケート調査結果

5段階法による13対の形容詞の分析結果は、高齢者擬似体験前の平均値3.08、体験後の平均値が2.78であった。体験前のイメージが最も否定的な数値を示した項目は、「強い―弱い」3.75、「健康―不健康」3.42、「活発―不活発」3.35であった。また、最も肯定的な数値を示したのは、「暇な―忙しい」2.17、「幸福な―不幸な」2.65であった。体験後の「強い―弱い」は、下がっていはいるが3.26と高い。また、「暇な―忙しい」のみが2.17から2.42とわずかに上昇を示している。

体験前後のイメージ変化については、「きれいな―きたない」（$P<0.0001$）で有意差があり、「強い―弱い」「暇な―忙しい」「意欲のある―意欲のない」（$P<0.01$）、「生き生きした―生気のない」「健康的な―不健康的な」「幸福な―不幸な」（$P<0.05$）で有意差があった（Mann-Whitney のU検定）。

年齢別による差の有無を見ると、体験後に有意差は無くなったものの、体験前には「生きがいがある―生きがいがない」で有意差が見られた（$P<0.05$）。詳細は18歳代で2.8、19歳代で3.3、20歳代で4.5と体験者の年齢が高くなるに従って否定的イメージに傾いている。

性別による差の有無を見ると、体験前は男女差に有意な変化は見られなかったが、体験後に有意差のある項目があり、それは、「きれいな―きたない」について男性が3.21、女性が3.17の男女間に有意差が見られた（$P<0.05$）。詳細は、表2に示した。

高齢者との同居の有無、ボランティアの有無には、有意差は見られなかった。

2．学習内容の順序性に関する分析結果

学習の順序性について、高齢者擬似体験と高齢者施設見学のどちらを先に体験したかで学習効果への影響があるかどうかを見た。表3に示した。また、学生が体験した当日の高齢者施設の対象者の介護度を表4にまとめた。

高齢者への理解度について、5段階評価では高齢者擬似体験先1.55±0.6（mean±SD）、高齢者施設見学先1.67±0.9（mean±SD）でありいずれも高いが、高齢者擬似体験を先に学習した方がわずかに高い。有意差

表2　高齢者擬似体験前後差の比較による有意差について　　n＝48

項　目	前平均値（後平均値）	体験前後の有意確率			
		体験前後差	年齢差（前のみ＊）	性別差（後のみ＊）	同居差（後）
自　　信	3.19（2.98）	0.261	0.054	0.198	0.488
活　　発	3.35（2.96）	0.074	0.119	0.216	0.652
生きがい	3.0（2.92）	0.521	0.012＊	0.299	0.335
強　　い	3.75（3.26）	0.007＊＊	0.891	0.113	0.932
生き生き	3.0（2.65）	0.015＊	0.279	0.745	0.886
意　　欲	3.1（2.71）	0.01＊＊	0.353	0.884	0.553
自　　立	3.27（2.96）	0.087	0.088	0.946	0.757
健　　康	3.42（2.89）	0.003＊	0.114	0.374	0.956
きれい	3.17（2.54）	0.0001＊＊＊	0.099	0.038＊	0.088
にぎやか	3.0（2.79）	0.112	0.763	0.768	0.161
自由な	3.02（2.73）	0.142	0.823	0.714	0.103
暇　　な	2.17（2.42）	0.007＊＊	0.191	0.051	0.222
幸福な	2.65（2.36）	0.043＊	0.126	0.991	0.141

Mann-Whitney の検定　＊＊＊ $P<0.0001$ ＊＊ $P<0.01$ ＊ <0.05

表3　擬似体験と施設見学の前後差について

	擬似体験先	施設見学先
	平均値（標準偏差）	平均値（標準偏差）
	有意確率	
高齢者理解度	1.55(0.596)	1.67(0.889)
通所リハビリテーション	1.57 0.014 *	2.00 0.135
グループ・ホーム T.	1.53 0.174	1.33 0.649

Kruskal Wallis 検定　* P<0.05

表4　学生が見学した日における施設の利用者介護度状況

<通所リハビリテーション施設>			<グループホーム・高山の家>		
要支援	1名	(7%)	要支援	0名	
要介護1	3名	(22%)	要介護1	2名	(11%)
要介護2	6名	(43%)	要介護2	5名	(28%)
要介護3	2名	(14%)	要介護3	8名	(44%)
要介護4	2名	(14%)	要介護4	3名	(17%)
小計	14名	(100%)	小計	18名	(100%)
合計　32名					

人数（%）

は見られなかった。

また、見学した高齢者施設は2箇所で、学生は半々に分かれて見学を実施した。見学した施設の種類によって学習効果に違いはあるかどうかを見ると、Tグループホームと通所リハビリテーション施設との間には、高齢者擬似体験を先に体験した後に通所リハビリテーション施設で見学した学生の学習満足度に有意差があった(Kruskal Wallis の検定)。また、高齢者施設を先に見学した学生の満足度幅は、施設間に0.67差があり、高齢者擬似体験を先に実施した学生の満足度幅は0.04と少なくほぼ同じである。高齢者施設見学が先の学生の満足度には施設によって差に開きを認めた。

3．連続学習による体験記録の結果

連続した学習の終了後に記載した体験記録をカテゴリー化し、その結果を表5に示した。

高齢者擬似体験および高齢者施設見学による体験記録を整理すると5分類できた。最初に、身体各部位の

表5　高齢者擬似体験後の体験記録　　n＝48

カテゴリー	具体的な体験内容
1．身体的側面：	1）よく見えない。2）視野が狭い。3）曇っていて見づらい。4）遠くまで見えない。5）足元が見えない。6）1メートル先のことが分からない。7）周囲を把握するのに困難である。8）聞こえずらい。9）足がうまく動かせない。10）足や腕が曲げられない。11）足が重い。12）利き手利き足の自由がきかない。13）足首がよくまわらない。14）段差が見えにくい。15）息切れがする。16）身体が麻痺していくように動かすことができなかった。17）指先が滑るので作業が大変だった。18）聞こえにくい。19）関節を動かしにくい。20）使いたい筋肉が使えない。(20項目)
2．心理的側面：	1）思うように動かせないのが辛かった。2）少しの溝でも危険で不安である。3）どんなに頑張ってもいつものように歩けないのが辛かった。4）階段の登りより降りるほうが不安定だった。5）視野が狭く暗くみえるので怖かった。6）夜道ならかなり危険だと思った。7）緑と青の識別が困難だった。8）白っぽい靄が周囲を見づらく怖い。9)自由に動けないので困ると思う。10)一歩一歩が遅くなるので思うように進めず、焦ってしまう。(10項目)
3．援助的側面：	1）階段をおりるのは1人を2人でみる必要がある。2）祖母もこのような大変さを味わっていたのだと思った。3）困っているお年寄りを見たらすぐに助けてあげたい。4）聞こえずらいので警報機などの音が適切でない。5）毎日の生活が大変なんだと気付いた。6）介助の重要さを知ることが出来た。7）ゆっくり声かけをして落ち着かせ、慎重に足を運んでもらうことが重要だと思った。8）物をよけるにもよけられない。9）障害物をまたぐ時は介助者が注意する必要がある。(9項目)
4．健康観的側面：	1）足腰を鍛えておくことが大切であると思った。2）身体の一部を固定しただけなのに簡単に自然の動きがとまってしまう不思議さを感じた。3）今の自分達とは全く違うことが分かった。4）自由に動くことのありがたさを知った。5）急ぐことは怪我につながるので注意する必要がある。6）杖がないと静止できない。杖の大切さを知った。7）高齢者は身体が曲がったり、関節が曲がらなかったり大変だと感じた。8）老人になるとこんなふうに身体が変化してしまうことが不思議だ。(8項目)
5．全体観的側面：	1）体験して始めて分かった。2）これからもっと高齢者を大切にする必要がある。3）何気ないことでも苦労することに気付いた。4）身体の自由がきかなくなることは大変なことだと分かった。5）速い動作をさせるには良く考慮すべきである。6)階段を下りるのが大変なのは重心が前へ傾くことが理由ではないかと思う。7）80歳くらいの人でもバイクに乗っている人がいるが視野狭窄の課題があり危険である。8）身体の様々所に障害が出たらもっと大変であると思う。9）立ったり座ったりする基本動作がとても難しい。10）高齢者は行動が遅いが仕方がないことが分かった。11）咄嗟のことが出来ない。12）一度転んだら起きあがるのが大変である。13）老人の身体は重いのだろうと思った。14）老人が何度も聞き直すのが分かった。(14項目)

働きや筋肉、関節などの不調に関する記録を「身体的側面」とし20項目、次に、身体変化やその他の不便さに関する不安や苦痛は「心理的側面」とし12項目、更に、心身の変化や大変さから援助の必要性について考えたことは「援助的側面」とし9項目、そして、病気を予防したり、援助を受けなくてもよいような工夫、気付きに関することは「健康観的側面」とし7項目、最後に、その他多くのことを包含した内容を「全体的側面」として14項目あり、全5項目62文章に整理した。身体的側面に関することが最も多く、次いで、全体的側面、心理的側面、援助的側面、健康観的側面の順に学びを深めている。

Ⅳ．考　　察

1．高齢者擬似体験前後の高齢者イメージ

1）高齢者イメージの全容

イメージとは、広辞苑によると、心の中に思い浮かべる像である。心に浮かべるためには、経験や知識、思いなどから自分なりに体系づけた概念的思考が必要であるとすると、学習方法や体験内容はイメージ作りに重要であると考える。

本研究において、高齢者擬似体験前の高齢者イメージは平均値3.08であり、体験後の平均値は2.78であったことから、否定的イメージから肯定的イメージに変化したことが明らかになった。また、今回の体験学習によって肯定的イメージへの変化が可能になることが示唆された。詳細については、「弱い」、「不健康な」、「不活発な」、「依存的な」、「自信のない」、「きたない」が否定的イメージに影響し、体験後の肯定的イメージに影響したのは「きれいな」、「強い」、「忙しい」、「意欲のある」、「生きがいのある」、「健康的な」、「幸福な」などが影響していた。

このことから、体験学習前には、病気がちで依存的な30年前の日本における固定的なイメージとは内容や程度に差はあっても否定的イメージを持たれていたことになり、高齢者イメージは外見によって強く影響されていた[4]という先行研究に等しい。しかし、認知症高齢者へのイメージは否定的イメージであるとする研究が多い[5]という結果とは異なっていた。体験学習後のきれいで、幸福な高齢者をイメージさせた背景には、歴史的経済的背景の推移とともに、高齢者施設職員によるケアが行き届いていることや家族のサポートができていることなどが考えられる。そして、生きがいを持ち、強さや意欲のある健康的な高齢者イメージからは、高齢者は、時間を刻みながら様々な経験の中で不安や脅威にさらされ、自分と闘い、弱さを受け入れながら、強く生きている存在である[6]とする高齢者の描き方に一致するものである。

2）属性による高齢者イメージの比較

看護大学生の年齢別による高齢者へのイメージ変化は、体験学習前は「生きがいがある－生きがいがない」について有意差があり、20歳前の看護学生は肯定的イメージで、20歳以降になると否定的イメージが高く現れていた。しかし、体験学習後になると均一化して肯定的イメージに変わった。

また、性差による高齢者イメージの変化については、体験学習前は有意差がなかったが、体験学習後に「きれいな－きたない」について男女差が見られ、女性は男性より有意に肯定的なイメージの数値を示した。

このことから、20歳前の学生に比べて20歳以降の学生は生きがいについて否定的反応を示し、また、男性より女性はきれいであることに肯定的な反応を示したことから、利用者に女性が多かったことなどを含め自己と重ね合わせて思い描いた可能性が考えられる。また、20歳以降は認知の仕方に現実感が増す可能性があることから、高齢者擬似体験学習は、高齢者の身になってみることにより、自分を知り、自分自身が学びを通して変わるという体験になっていく[7]という見方に一致する。体験記録内容と重ね合わせた場合においても、身体的側面に留まらず、援助的側面や健康観的側面に及んでいることなどから、看護大学生の内面に働きかける学習であることが示唆された。

2．学習の順序性と高齢者理解

本研究において、高齢者擬似体験及び高齢者施設見学による高齢者への理解度は高い評価となった。

学習の順序性の視点からみると、高齢者理解度における基礎資料の結果、高齢者擬似体験を午前中に行い高齢者施設見学を午後に学習した者は、高齢者施設見学を先に行った者より学習理解度がわずかに高い。特に高齢者施設は、通所リハビリテーション施設見学との組み合わせの間に有意差があった。

このことから、高齢者施設の種類によって結果にばらつきが出たのは、高齢者施設のうちTグループホームは認知症高齢者が多く、介護度も高く、コミュニケーションが取りにくい一方、通所リハビリテーション施設は脳血管障害後遺症の者が多く、不自由であるがコ

ミュニケーションは取れる。前者では生活の場を見ることになり高齢者像を広げやすいが、後者は通所でありその場の状況からの理解に留まることも理由のひとつと考える。また体験記録にあったように、学生はコミュニケーションを取ることに困難を示したことなどから、体験することと見ることの違いや困難さが思慮深さを生み、学生の高齢者理解に影響した可能性がある。

3．連続学習による学習効果

本研究は、体験学習記録の分析においては、62の文章から5つのカテゴリーに分類され、身体的側面に対する学習に留まらず、心理的側面、援助的側面、健康観的側面へと学びの範囲を拡大させていった。これらの体験は、視覚、聴覚、足腰の筋力、関節の拘縮、麻痺などによる外観的なイメージからの理解が動けない辛さ、見えにくい不安などの内面的な理解へと発展させ、高齢期を迎えるために心がけることを考えようとした思考過程が伺える。また、全体的な側面を網羅して理解していることから、高齢者の身体的・心理的・社会的側面に関する概要のレクチャーおよび高齢者擬似体験、高齢者施設見学による連続した学習により、集中力が関心をさらに発展させ、知識をもとに擬似体験を行い、体験したことをディスカッションし、イメージを持って現実に触れてみるというプロセスを経て、記憶に刻み思考を発展させることを可能にしていると考える。

高齢者擬似体験や直接高齢者に関わってみる学習は、対象者の個別性に触れ、学生が体験途中で自分に気付く。身体的機能低下だけでなく心理社会的側面をも連想していることから高齢者理解を豊かにする方略である[8~10]と述べており、本研究はこれを指示するものである。看護学生の1年次前期の終了時ということもあり、連続的な積み重ねによる思考の連鎖が、導入教育の方法の一つとして効果的であることが示唆された。また、短期間に集中して展開する有効性は、知識・技術が体験によって統合され、漠然としたイメージがすみやかに実感を伴って認識されるに至ることが確認されたと言える。

研究の限界として、調査対象が本学1年生に限られたことが挙げられる。今後はサンプルを蓄積していく必要がある。

今後の課題は、体験学習前の背景を限定せずに把握すること、高齢者擬似体験中の作業を増やすこと、高齢者イメージの有効活用を検討することである。

Ⅴ．結　　語

体験学習前後で高齢者イメージがどのように変化したかを明らかにし、また連続学習の効果について示唆を得ることを試みた。

1．短時間のレクチャーと高齢者擬似体験及び高齢者施設見学による学習は、否定的イメージから肯定的イメージに変化させ、高齢者イメージ作りをするのに有効である。顕著な変化としては、「きれいな―きたない」「意欲のある―意欲のない」「強い―弱い」「健康的な―不健康的な」「幸福な―不幸な」「暇な―忙しい」「生き生き―生気のない」は、肯定的イメージへの変化に有意に影響した。

2．看護学生の属性による比較では、「生きがい」に関して体験学習前は、20歳前では肯定的イメージを持ち、20歳以降は否定的イメージを持っていたことから、年齢別で高齢者イメージがあるということが示唆された。また、性別については、女性は男性より体験後に「きれいな―きたない」について肯定的イメージに変化する傾向が示唆された。

3．体験学習の順序性は、高齢者擬似体験を実施した後に高齢者施設見学による直接的な関わりを体験する順序の方が理解度が高く、また、高齢者の生活の場を含めた学習の方法が理解度が高い可能性が示唆された。

4．学生が描いている高齢者イメージは、体験したことや見学したことなどによって形成され、知識や体験の有無により理解度が左右される傾向が示唆された。従って、偏りの少ない高齢者理解のためには、教育の順序性や教育方法を考慮することが必要である。

5．連続学習は、身体的側面に対する学習に留まらず、心理的側面、援助的側面、健康観的側面へと学びの範囲を拡大させた。知識の導入、高齢者擬似体験、高齢者見学学習による連続的な学習の積み重ねは、学習による思考の連鎖を発展させ、導入教育の方法の一つとして有効であることが示唆された。

Ⅵ．謝　　辞

今回の報告に際し、学生の体験学習にご協力下さいましたグループホーム高山の家及びパース診療所通所

リハビリテーション施設の利用様、同施設の職員の皆様に、深く感謝の意を表します。

Ⅶ. 文　　献

1）菱沼典子、太田喜久子、小山眞理子、他：看護学生の老人イメージについての一考察．看護教育　8(36)：1995：p730-735.

2）袖井孝子：高齢者イメージの変容に期待．Aging & Health(10)：2002：p5.

3）小泉美佐子、伊藤まゆみ：ライフ・ヒストリーインタビューによる看護学生の高齢者イメージの変化―高齢者一般のイメージとインタビューに応じた高齢者像の比較から―．群馬大学医学部保健学科紀要 19：1998：p31-36.

4）小林尚司、萩野朋子、伊藤孝治、他：色を使った、高齢者イメージの測定の試み．名古屋県立大学看護学部紀要　1：2001：p89-91.

5）加藤知可子：高校生を対象とした認知症高齢者に対するイメージに関する検討．日本老年看護学会(36)：2005：p133.

6）中村真理子、服部典子：老人看護実習後の高齢者イメージ―老人イメージマップの連想言語から―．東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報 12：2002：p18-23.

7）服部紀子、中村真理子：老人イメージの変化―高齢者擬似体験前後の比較から―．東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報　11：2001：p12-20.

8）古城幸子、木下香織、馬本智恵：老年看護学の授業による学生の高齢者イメージの変化．日本看護学教育学会誌．第13回学術集会　13(8)：2003：p191.

9）吉本知恵、横川絹江：看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子―3年制看護短大生の学習進度による比較―．日本看護学教育学会誌　1(41)：2004：p35-45.

10）吉本知恵、横川絹江：実習における看護学生の認知症高齢者に対するイメージの変化と影響因子．日本老年看護学会　(10)：2005：p97.